ISSN 2186-7259

Sept. 2018

ZENBI

全国美術館会議機関誌

September 2018 [Vol.14]

Vol.14

ICTを活用した見学スタイルで 新たな感動価値を

多言語対応・合成音声・ビーコン対応。
見学者ご自身のスマホ・タブレットで音声ガイドを楽しむことができるアプリです。

MUSENAVI
音声ガイドアプリ　ミューズナビ

ミューズナビ

MUSENAVIが新しくなりました。
フルスペック機能を
最新デザインで体感できます

新機能

- ◆ カテゴリーごとの表示
- ◆ SNSライクなカラム表示
- ◆ 画像の複数枚登録＆拡大縮小機能
- ◆ 画像認識
  カメラ撮影による音声再生開始など
- ◆ ツアーガイド機能
  ガイドスタッフによる音声再生開始など

導入実績：岡山県立美術館様／佐久市考古遺物展示室様／トヨタ博物館様／カップヌードルミュージアム 横浜様／鳥取砂丘 砂の美術館様
その他の実績はサイト・資料請求にてご確認ください。（順不同）

岡山：岡山県倉敷市阿知 1-7-2　tel 086-426-5932
東京：東京都千代田区神田神保町 4-3-12　tel 03-5280-9150
大阪：大阪府大阪市都島区片町 2-2-40　tel 06-6242-8090

ミューズナビ　http://www.musenavi.jp/

PEOPLE SOFTWARE
私たちは感動価値創出企業を目指します
ピープルソフトウェア(株)

お問い合わせ・資料請求はお気軽に　0120-960-228（通話料金無料）
携帯電話からは 086-426-5932（通話料金がかかります）受付時間 9:00～18:00（平日）

掲載されている会社名・商品名・サービス名は各社の商標または登録商標です。記載の製品仕様は、予告なく変更する場合がございますのであらかじめご了承ください。

Contents

ブロック報告

2 ［北海道］ なとわ・ほっかいどう・美術展　寺嶋弘道

4 ［東　北］ 雪どけの後に―美術のタネ、芽吹く東北　奥脇嵩大

6 ［関　東］ 山梨から関東諸国（?）美術館めぐり　平林 彰

8 ［東　京］ インスタ映え、#MeToo、リーディング・ミュージアム　成相 肇

10 ［北信越］ 北信越この1年　谷口 出

12 ［東　海］ 休館が続く中、際立つ企画展　高北幸矢

14 ［近　畿］ 留め置けぬ芸術と共に　橋本 梓

16 ［中　国］ 地域密着の企画展が盛ん　神 英雄

18 ［四　国］ 四国の学芸員力を考える　川浪千鶴

20 ［九　州］ コレクションを生かした展覧会作り　森園 敦

新規正会員紹介

22 有島記念館

23 中札内美術村

24 喜多方市美術館

25 武蔵野市立吉祥寺美術館

26 豊川市桜ヶ丘ミュージアム

27 北九州市漫画ミュージアム

賛助会員各社　28

事務局から　29

「先進美術館」に端を発した議論と全国美術館会議声明
「美術館と美術市場をめぐる基本姿勢について」に関わる経過報告　31

編集後記　33

投稿要領　34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定　34

ISSN 2186-7259

ZENBI　全国美術館会議機関誌　Vol.14　2018年9月1日発行 ©全国美術館会議

［編集］ 全国美術館会議機関誌部会　幹事　尾﨑信一郎　青山杏子

［発行者］ 全国美術館会議　〒110-0007　東京都台東区上野公園7-7　国立西洋美術館内　TEL 03-3828-0290

［デザイン］ 宮谷一款（日本写真印刷コミュニケーションズ）［印刷］ NISSHA株式会社　〒604-8551　京都市中京区壬生花井町3

北海道ブロック

なとわ・ほっかいどう・美術展

寺嶋弘道（てらしま ひろみち・本郷新記念札幌彫刻美術館）

「A と B」「B と A」。どちらも同じようなものだが、それが違うのだと先輩学芸員から教わったのは 30 年以上も前、美術館に就職してしばらく経った頃のことだ。

1977 年にオープンした北海道立近代美術館では、「明るい・暗い」などをテーマに、鑑賞入門の展覧会を毎年実施していた。そのシリーズ化された展覧会の名称が「子どもと親の美術館」だった。「親と子の美術展」ではない。「子供」ではなく「子ども」、「美術展」ではなく「美術館」、そして「親と子」ではなく「子どもと親」でなければならないと説明を受けた。漢字一文字、順番一つ、それが重要なのだと聞いて、なるほどと思ったことである。

以来、展覧会やイベントの命名に、毎回、相当な時間と情熱を注ぎ込んだものだ。副題やキャッチコピー、字体、記号にも知恵を絞り、工夫に工夫を凝らす。学芸員にはコピーライターの才能も必要で、やがてその生みの苦しみが喜びに変わることを知った。

さて、昔のことを思い返してみたのも、この半年の展覧会を振り返ったとき、「FACE ／わたしとあなた」と題された展覧会のタイトルが気になったからだ（北海道立帯広美術館、2017 年 11 月 25 日～2018 年 2 月 25 日）。

「あなたとわたし」ではなく「わたしとあなた」だ。普段は「あなた」を先に言うことが多く、何度反芻しても口に馴染まないのである。そもそも、面と向かって「あなた」と呼びかけることはあまりない。この代名詞は、相手のことを考えたり、心に思い描いたり、独り言としてつぶやいたり、あるいはあえて意識的に注意喚起したりするときに使う言葉である。

一般にはどうだろう。世代や性別や地域によって違いはあるのか。たとえば、歌を口ずさんでみる。

《大きな栗の木の下で》♪おおきなくりのきのしたで／あなたとわたし／なかよくあそびましょう♪　（イギリス民謡　訳詞者不明）

《てんとう虫のサンバ》♪あなたとわたしが夢の国／森の小さな教会で／結婚式をあげました♪　（作詞　馬飼野俊一）

ちなみに歌詞検索サイトの結果は、「わたしとあなた」というフレーズのある歌謡曲は 50 曲あまり。一方「あなたとわたし」は 250 曲以上にのぼる。言葉は使われる状況や文脈や使う人の感情などによって、伝わる内容や意味が微妙に変化する。まして、「あなた」はしゃべり言葉ではないし、歌詞の場合、相手を想う気持ちを歌うわけだから「あなたとわたし」が多用されるのかもしれない。

北海道には函館に「なとわ・えさん」という道の駅がある。「えさん」は地名（恵山）だが、「なとわ」は青森に由来するこの地域の方言で、「あなたとわたし」のこと。道路通行者の憩いの場として、多くの人々の利用に寄与したいという施設の側の思いが伝わってくる。

では、北海道立帯広美術館の「FACE」展はどうか。展覧会の構成は 4 章に分かれ、文字通りさまざまな「顔」が並んだ。第 1 章「わたしを見つめる」では自画像が、第 2 章「あなたへの視線」ではモデルの姿を捉えた絵画や彫刻が展示された。第 3 章「かなたの姿」ではアフリカの仮面の数々が、最後の章「FACE は語る」では顔を手がかりに多様な人間表現が紹介された。

信仰や祭礼と結びついた第 3 章の異形の造形物以外は、作者が明白ないわゆる芸術作品である。「わたし」を見つめ「あなた」へ視線を送るのも、顔を通して何かを語っているのも、その人間像の作者である。したがって、鑑賞者は芸術家の視点から世界を眺めることになる。一般に、美術は自己を表現する行為だとみなされているから、当然のこととして「わたし」が世界の中心に存在するのだ。

ところで、そういう「わたし」にとって一番身近な他者が家族であろう。今日の美術家がこのテーマにどう向き合い、いかに表現しようとしているか。それを探ろうとしたのが、「家族の肖像」展（本郷新記念札幌彫刻美術館、2017 年 7 月 22 日～ 10 月 1 日）である。

しかし、この企画展も「わたし」という作品制作者の表現を通してしか展覧会を組み上げることができないという隘路が、展示内容の限界となった。すなわち「家族」という主題は少子高齢社会の重要な課題であるのに、作品は驚くほど少ないという現実に直面したのである。

現代の画家や彫刻家は、今日の社会的課題をテーマにしていないのではないかという素朴な疑問。いや、そうではなく、個別的な「わたし」をみせようとしながら、個性的表現の呪縛にさいなまれているのではないかという反駁。そもそも美術は、自身の心象や自分事の発現にとどまるものなのか。他者理解のために有効な手立てとなるものではなかったのか。

自国第一主義が世界を覆い始めている。「わたし」が化身するハロウィーンの市場規模が、「あなた」のためのバレンタインデーを上回ったという。インスタ映えする自撮りの時代は、排外主義と自己顕示が横行する時代の予兆でもあろう。そんな時代ゆえ、来場者に対してよき贈り物となるような展覧会を企画したいと願うのである。

「なとわ」はまた、「きみとぼく」「きさまとおれ」と同義であるが、もう一つ、前後が入れ替わった「おれとおまえ」は、つい乱暴に口から出てしまう自分本位の言葉だ。更に昨今は「オレオレ」と繰り返すジコチューの詐欺の被害が拡大している。くれぐれもご用心。

北海道立帯広美術館　「FACE／わたしとあなた」展 会場風景

本郷新記念札幌彫刻美術館　「家族の肖像」展 会場風景

東北ブロック

雪どけの後に―美術のタネ、芽吹く東北

奥脇嵩大(おくわき たかひろ・青森県立美術館)

今年は特に厳しいように思われた冬がようやく終わり、待ち焦がれた春が青森にも訪れた。毎年この時期になると、冬から春にかけての東北の風景が変化する速さに驚かされる。冬の間中、辺りを真っ白く染めていた雪は瞬く間に姿を消し、ここには雪なんて元からありませんでしたよ、と言わんばかりだ。感覚としては在り続ける雪が現実の土の上にはもうない、ということ。こうした記憶と現実のズレに人の土地への思い－例えば郷愁の念－が宿るのかもしれない。

さて昨秋から2018年3月までの東北ブロックを振り返ると、土地や美術、美術館という場所自体を問い直す動きや展覧会が多く見られた半年間であったように思う。次段以降で詳しく見てみよう。

青森県弘前市には明治大正期に建設された東北屈指の酒造工場や、市出身の現代美術家・奈良美智の展覧会場として知られる「吉野町煉瓦倉庫」がある。現在、官民連携してこの煉瓦倉庫と周辺緑地をリニューアルし、「赤煉瓦倉庫の魅力を最大限活用し、現代アートのクリエイティブハブをつくる」を運営方針とした「(仮称)弘前市芸術文化施設」を2020年4月の開館に向けて整備する計画が進む。2017年度は「れんがそうこ部」による調査と記録、成果発表や、煉瓦倉庫をモチーフとした野外劇の上演、「弘前から世界へ～美術館が開く創造性と可能性～」と題したトークイベントが行われた。同県八戸市では現行の八戸市美術館の施設老朽化や、整備を求める市民の声を受け、やはり2020年の開館に向けて「八戸市新美術館整備事業」が進む。2017年度は情報発信・交流拠点「はちのへまちなかアートラボ　Co部屋（コベヤ)」を開設。そのほか市民との意見交換会や「八戸市の新しい美術館を考えるシンポジウム」を展開した。両市の美術館整備事業において共通するのが、作品の収集・保存・展示・調査研究・教育普及という美術館機能を拡張し、地域と成長する美術館モデルを打ち出している点である。例えば弘前では企画展やコレクション形成の柱として赤煉瓦倉庫の建築や場所性を活かした作品や弘前・東北地域の自然や歴史、物語を素材とした作品が想定され、八戸では美術館の基本構想として「アート・エデュケーション・ファーム～種を蒔き、人を育み､100年後の八戸を想像する美術館～」をテーマとし、それを受け、公募型プロポーザルにおいて最優秀となった設計案では、美術館と市民が一体となった「ラーニングセンター（学びの拠点)」機能が掲げられた。ここで美術館という美術にとっての特権空間は、地域に受け継がれてきた知恵や文化といった時間的可変概念により更新され、人と人、人と地域の交差領域としての可能性が前景化することになる。こうした美術館の展開は、一定の空間を占拠し、そこで推移する時間の影響を受けざるを得ないインスタレーションや、いわゆる「地域アート」的な作品展開とも軌を一にする。その意味で二つの地域美術館の活動は、恐らく今後の日本の美術全体の展開をも占う試金石となるだろう。

地域で美術をどのように位置づけ、アプローチするかはもちろん、これらの新美術館に限って行われる事業ではない。青森県立美術館では2017～18年度の2年間、農業とアート体験をかけ合せた事業「アグロス・アートプロジェクト　明日の収穫」を展開している。本プロジェクトにおいてアーティストと参加者は、美術館敷地内でお米や雑穀を育てる農作業を体験し、そこでの収穫物をはじめとした自然素材を画材に加工し、一つの作品をつくり上げる。本プロジェクトは青森における自然の知恵や農業の歴史をもとに、作品を制作する場を美術館がプロデュースすることで、地域と人がともに成長するための芸術的余地を、地産地消で設定し得るかを問う試みである。岩手県花巻市の萬鉄五郎記念美術館では戦後盛岡の若手美術家グループ「集団N39」の一員であった橋本正（1926-77）の回顧展「橋本正展　記憶に残るかたち　忘れられない風景」(2017年9月23日～11月26日)や、大正末期の美術家グループ「造形」に参加し、戦後は岩手の風景を描き続けた寺島貞志（1905-83）の戦後の画業を紹介する「寺島貞志展　《戦後の歩み》」(2017年12月2日～2018年2月18日）が開催された。宮城県仙台市のせんだいメディアテークでは「技術」と「美術」の関係を主軸に、震災後の東北に関心を寄せる青野文昭、飯山由貴、井上亜美、高嶺格、門馬美喜による「コンニチハ技術トシテノ美術」展（2017年11月3日～12月24日）が開催された。

上記はいずれも地域の中で美術がいかに機能し得るかを問う実践の積み重ねであり、こうした傾向は今後ますます強まるだろう。今、東北の美術館において必要なのが、東北の土地性と向き合うための引き出しを多様に準備しておき、こうした取り組みがピークを迎えるであろう2020年以降に、地域における美術館モデルをいかにつくるか問い続けていくことだ。タネまきは既に始まっている。耳を澄ませばタネが芽吹く音が聞こえてくるかも…。

青森県立美術館「アグロス・アートプロジェクト　明日の収穫」で
2017年10月に行った稲刈りの様子

青森県立美術館「アグロス・アートプロジェクト　明日の収穫」
中間成果発表展示　会場風景

関東ブロック

山梨から関東諸国（?）美術館めぐり

平林 彰（ひらばやし あきら・山梨県立美術館）

甲府駅から中央線特急で新宿駅まで約１時間半。新宿駅から各地へは、ご存じのとおり。また途中の八王子駅から横浜、立川駅から川崎へも一本で出られる。高速道路は、中央道から、近年開通した圏央道へ折れれば南は神奈川県、北は埼玉県、北関東３県へのアクセスが格段と良くなった。こうした交通の利便性を生かして、当館学芸員は総出で積極的に各地の展覧会視察をしている。

まずは現代美術。横浜では、昨年の夏から秋にかけて「ヨコハマトリエンナーレ 2017 島と星座とガラパゴス」（横浜美術館など、2017 年８月４日～ 11 月５日）が開催された。それに連動して BankART Studio NYK では「BankART LifeV 観光」なども開催され、山梨ゆかりの開発好明や丸山純子も出品した。開発は１階のショップでテレビモニターを使用した作品を数点展示し、丸山はレジ袋を使った幻想的な花畑を３階のエレベーターを出てすぐに展開した。その後、会場の一つ横浜美術館では「ヌード NUDE －英国テート・コレクションより」（3月24日～6月24日）が開催。「物語とヌード」や「身体の政治性」などの８つの章を通じて、19 世紀末から現代までの身体と表現を問う意欲的な展覧会であった。川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎とメディアアート　山口勝弘－受け継がれるもの」展（2017 年 11 月３日～ 2018 年１月 28 日）は、岡本の作品と、岡本の精神を受け継いだ山口勝弘、さらに新しい世代のアーティストの作品を並べることで、昨今、芸術の一分野として確立した感のあるメディアアートの歴史的な流れを、新たな角度から提示して見せる新鮮な展示であった。さらに同館では「第 21 回岡本太郎現代芸術賞（TARO 賞）」展（２月 16 日～４月 15 日）が開催され、山梨県出身のさいあくななちゃんが岡本太郎賞を受賞し、アニメ風の少女の無数のドローイングと、その可愛さとは裏腹の残酷な言葉を組み合わせた、ピンクを基調としたインスタレーション《芸術はロックンロールだ》を披露した。千葉市美術館では「小沢剛　不完全―パラレルな美術史」展（１月６日～２月 25 日）が開かれた。「美術史」を基盤に独自の物語を紡ぐ小沢の個展であり、「パラレルな美術史」にテーマを絞っていたため、それ以外の作品は出品されなかったが、個展だけにその他の作品も見てみたいと思った。

戦後版画では、川越市立美術館で「中林忠良銅版画展　腐蝕の海／地より光へ」（2017 年 10 月 28 日～ 12 月 10 日）が開催された。すっきりとした会場で、中林のモノクロームの作品がいかなる変遷を辿ったか、制作にどのような姿勢で臨んでいるかが良く分かる展示であった。同じく現代の銅版画の第一人者で 2017 年１月に死去した深沢幸雄の追悼展が、千葉県の各地で開催された。深沢が長く暮らした市原にある市原湖畔美術館（１月６日～２月 12 日）では、作家が撮影した映像にオリジナル音楽をつけて編集するなど、見せ方の工夫が多く施されていた。千葉県立美術館（2017 年 10 月 28 日～ 2018 年１月 14 日）では、銅版画になじみの薄い来館者にもよく分かるように、技法の解説が章ごとの解説の中に含まれ理解しやすいものになっていたことが印象深かった。

つづいて西洋美術。ポーラ美術館 15 周年記念展として開催された「100 点の名画でめぐる 100 年の旅」（2017 年 10 月１日～ 2018 年３月 11 日）では、約１万点の同館のコレクションを代表する 100 点の絵画が 20 のテーマに分けて展示された。19 世紀から 20 世紀半ばまで、西洋と日本の近代絵画の流れを代表する画家の作品を時系列にめぐることで、体系立った収集を継続した同館のコレクションのカラーが明確に浮かび上がる。設定されたテーマは、画家や芸術運動、主題や時代に関わるもので、それぞれの作品が生み出された文脈が浮かび上がり、鑑賞が作品そのものへと収斂していく。また、15 点ほどの作品には、様々な分野で活躍する著名人からのコメントが付されており、それぞれの鑑賞を追体験できる仕掛けがなされていた。美術関係者、照明家、修復家のみならず、作家、芸能人、ミュージシャンやパティシエまで、「この絵が名画である理由」をテーマに寄稿したものである。自分とは異なる文脈を持って作品と対峙する「他者」の鑑賞によって自身の鑑賞の相対化が促され、新たな鑑賞を生み出す契機となる仕掛けである。これまでに形成された館やコレクションの性格を明確に伝えるのみならず、作品を契機に多様な解釈が紡がれ続ける未来を提示する場となっており、館の周年を記念するのにふさわしい、大変充実した展覧会であった。

最後に古美術。千葉市美術館「百花繚乱列島－江戸諸国絵師めぐり－」展（4 月 6 日～ 5 月 20 日）は、北海道から長崎にいたる 90 名近い絵師の約 190 点もの作品が一堂に会した。想像以上に江戸絵画が豊穣であったことを実感できる好機となったとともに、精力的かつ丹念にご当地絵師を拾った努力に脱帽。それも全国各地に美術館が建ち、それぞれの学芸員が地道に地元の絵師を検証、再評価してきた蓄積あってのことであり、地方美術館の存在意義が再認識されることに一役買うと期待したい。

ポーラ美術館
「100 点の名画でめぐる 100 年の旅」展チラシ

千葉市美術館
「百花繚乱列島－江戸諸国絵師めぐり－」展
チラシ

東京ブロック

インスタ映え、#MeToo、リーディング・ミュージアム

成相 肇（なりあい はじめ・東京ステーションギャラリー）

筆者自身が関わった展覧会を含むので手前味噌めくけれど、2017年度から2018年度にかけては都内で建築展が相次いで開催されたことが印象深い。パナソニック汐留ミュージアム「日本、家の列島」展（2017年4月8日〜6月25日）、東京国立近代美術館「日本の家」展（2017年7月19日〜10月29日）、国立新美術館「安藤忠雄展」（2017年9月27日〜12月18日）、東京ステーションギャラリー「くまのもの」展（3月3日〜5月6日）、森美術館「建築の日本展」（4月25日〜9月17日）。これほど連続するのは、各展のタイトルも示すように、日本の建築家の国際的な評価の高さあってのことだろう。どの会場でも建築を学ぶ学生やゼネコン関係者らしき来場者をよく見かけたのは当然といえるが、その中に親子連れが多く混じっているように見えたことが記憶に残っている。特に住宅に的を絞った「日本、家の列島」及び「日本の家」において顕著で、来場者が自分自身に関わるものとして文化に触れ、美術館と生活空間との回路が形成される場に立ち会うようで素直に好感を持った。その回路はまた、展示室内の撮影推奨という形で枝葉を伸ばしてもいる。かねてから漸次的に試みられてきた手法ながら、昨今の「インスタ映え」の流行に重ねてマスメディアでしばしば報じられた。まるで金角銀角の瓢箪のごとくあらゆる体験を吸収していくスマホは、生活空間というよりごく個人的な感覚器官となって、展示室の内と外の距離を極度に縮めつつある。デバイスを介した方法に限らず、歴史以上に物語を押し出した構成で盛況を博した上野の森美術館の「怖い絵」展（2017年10月7日〜12月17日）も、作品ないし展覧会の享受体験をより個人的に内面化する潮流を体現していたように思えた。今後の運用次第で、この流れは個人の解放と囲い込みのいずれにも転び得るだろう。機械学習によって選択を先取りするNetflixや、すべての洋服をいわばオーダーメイド化しようとするZOZO SUITよろしく、おそらくは不可避的に、展覧会は微細に個人へとつながっていくことになるだろう。

社会動向と関連づけたトピックをもう一つ。「HOKUSAIが西洋に与えた衝撃」を副題に掲げた国立西洋美術館の「北斎とジャポニズム」展（2017年10月21日〜2018年1月28日）は、同館が冠する「西洋」の二文字がこの国において暗に前提としてきた非対称な受容関係に対して逆向きのベクトルで挑む企画趣旨が新鮮であった。文化的波及の領域を時間的・空間的にぐぐっと押し広げるという意味では東京国立博物館の「名作誕生」展（4月13日〜5月27日）もネットワークの拡張を図る意欲的な内容だった。非対称といえば、荒木経惟とモデルの間の関係をめぐる問題、あるいはいわゆる「#MeToo」ムーブメントが美術界を超えて騒動を呼んだ。ジェンダー論が研究と問題提起を蓄積してきたテーマの一つが世間的に浮上した格好で、偶像アラーキーの醸成に一役買ってきた美術館の業界にも説明責任があろうが、騒動化に先んじて、東京都写真美術館「荒木経惟 センチメンタルな旅」展（2017年7月25日〜9月24日）の図録ではすでに被写体の扱いに対する疑問が提示されてもいた。世田谷美術館「ボストン美術館 パリジェンヌ展」（1月13日〜4月1日）は女性に対する制度化された視線の変遷を描き出し、また太田記念美術館「江戸の女装と男装」展（3月2日〜25日）、弥生美術館「セーラー服と女学生」展（3月29日〜6月24日）も、ジェンダー観の振幅や現状を検討する上で有意義な素材を提供していた。社会的な関心も背景に、美学美術史や表象文化論のコアな研究成果をすみやかに反映し、美術表現の中にある権力構造に緻密に切り込む企画が増えつつあるように感じる。それだけ切迫した世の中だということかもしれないが。

最後に書かねばならないのは、直近で騒然となった、収集と保存という美術館の根幹に関わる事案のことだ。周知の通り、東京大学中央食堂を飾っていた宇佐美圭司の壁画が破壊・破棄されていたことがこの春に明らかとなった。壁から外し分割できることに気付かず破棄やむなしと判断するに至ったとのことだが、作品についての知識の有無や法的な権利問題以上に、絵を捨てるということが平然と行われたことが何よりもおぞましい。大学においてさえこのような事態が生じるのだ。美術館が前提とする作品の公共性、もしくはその公共性に対する感覚が揺すぶられ、凌辱された思いである。そして極め付きが、政府案として報じられた「リーディング・ミュージアム（先進美術館）」である。いわば美術館がアート・マーケットと結託し、作品の価値向上と市場活性化を図ろうというのだ。収集予算の少なさや学芸員の絶対数の少なさといった現状問題を把握しておきながら、収蔵品売却によってこれを打開しようというアイディアは失神ものだが、「ディーリング・ミュージアム」だとか「ミスリーディング・ミュージアム」だとか大喜利をやっている場合ではない。いま美術館は、政府のいう作品・資料の「活用」（「活用を阻む学芸員は癌」なる発言があったのは昨年4月のことだ）の語が孕む危機的状況をいかに乗り越えるかという局面に立っている。

国立西洋美術館「北斎とジャポニズム」展　会場風景

国立西洋美術館「北斎とジャポニズム」展　会場風景

北信越ブロック

北信越この１年

谷口 出（たにぐち いずる・石川県立美術館）

北信越この１年のトピックとして、再掲となる事項であるが、富山県の新しい美術館のオープンがあげられよう。その名も「富山県美術館」。県立近代美術館の老朽化に伴い、「アートとデザインをつなぐ」をコンセプトに掲げて富岩運河環水公園周辺に新設され、2017 年８月 26 日に全面公開となった。開館記念展以来、大勢の鑑賞者を集め、2018 年１月に来場 100 万人を数えている。富山駅に比較的近く、富山駅北側の地域活性化を期待した全面移転で、晴天時には総ガラス張りのホワイエから北アルプスの山並みが見渡せるなど、ぜひ一度は訪れたい美術館である。

福井県では、福井県立美術館が開館から 40 年を迎え、記念の企画展が開催された。「県立美術館名品 200 選」展（2017 年７月７日〜 10 月 22 日）と「狩野芳崖と四天王」展（2017 年９月 15 日〜 10 月 22 日）。前者は収集したコレクション約 3,000 点の中から、選りすぐりの優品 200 点に近代日本画の名品を加えて前後期４つの展示が行われた。後者は「芳崖四天王」に注目した初めてともいえる展覧会で、芳崖を中心に狩野派の最後を飾る画家たちの作品が並んだ。また四天王と同じ時代を生き、岡倉天心とともに日本画の革新に挑んだ横山大観や下村観山など日本美術院の作品も展示された。

長野県では一昨年に開館 50 周年を迎えた信濃美術館の全面改築が決まり、2021 年の開館を目標に計画が進んでいる。10 月より休館したが、県民から多くの声を取り入れ着々と整備されており、完成が待ち望まれる。

石川県・能登半島の最先端に位置する珠洲市一円では、「奥能登国際芸術祭 2017」が開催された。世界 11 の国と地域から芸術家 39 組が参加し、９月３日から10月22日までの50日間、「さいはての地」から現代アートと珠洲の魅力を発信した。来場者は作品鑑賞者が約 68,600 人、関連イベントに 2,600 人。目標の２倍以上となるあわせて７万人余りが珠洲を訪れた。

石川県立美術館では秋に「燦めきの日本画」展（2017 年９月 23 日〜 10 月 22 日）、明けて１月に「森羅万象をまとう」（1月４日〜２月12日）を行った。前者は、京都画壇で活躍した石崎光瑤とその周辺の画家を取り上げ、新春は木村雨山と二塚長生という２人の友禅の人間国宝の回顧展であった。

北陸全体では工芸の様々な催しが行われた１年であった。石川県で「100 年後の工芸のために 21 世紀鷹峯フォーラム in 石川・金沢」が開催された。10 月６日から 11 月 26 日の 52 日間にわたり、県内 60 の機関が参加し、164 の事業が行われた。日本の「工芸をつくり、使い、愛しむという文化」がこの先 100 年のちにも続いていてほしいという願いから 2015 年京都、2016 年東京で開催され、３ヶ年の締めくくりとして石川・金沢が選ばれた。「よき使い手とよき鑑賞者を生み出す」、「よいものをつくり続けるための支援」、「国内外の現代の生活の中に工芸がいきわたるために」という三つの課題をオールジャンル、オールジャパンの力によって解決策を見出し取り組むことを目的とした。これまで美術館、大学、研修所、画廊、販売店などそれぞれに企画があり、事業が行われてきたが、それらを一つのテーマのもとに結集し、活動の輪を広げる初めての試みともいえる事業であった。11 月 26 日、締めくくりのイベントとして「100 年後に残る工芸のために円卓会議」が開かれ、有識者だけでなく、工芸のつくり手、つなぎ手、使い手がそろい、意見を交換した。最後に「工芸の魅力を伝える技術を磨く」「工芸を使う楽しさを体感できる機会をつくる」「枯渇が懸念される素材や道具の確保、後継者の育成と製法の伝承にむけて全国的に連携を進める」という金沢提言が発表された。

また文化庁と北陸三県が連携し、北陸の工芸の魅力を世界に発信する「国際北陸工芸サミット」が始まった。工芸の現状を捉えなおし、その未来を見すえることを目指しながら、世界に誇る日本文化を広く国内外に発信するとともに、北陸を「工芸分野の文化芸術創造拠点」とすることを目的として開催されたものである。その第一陣は富山県で、11 月を中心会期として国際的なアワードやシンポジウム、展覧会、多彩な関連企画が開催された。なかでも「ワールド工芸100選」は「THIS IS 工芸－伝える。創る－」をテーマに世界各地の工芸の潮流と動向を探り、工芸という文化の持つ意義と未来の可能性を考える企画となった。

この「北陸国際工芸サミット」は今後 2019 年には福井、2020 年には石川での開催が予定されている。

工芸分野の企画展では、新潟市美術館で「人為と天然 Art/Nature」（2017 年 11 月３日〜 12 月 24 日）、高岡市美術館では「工芸の躍動」（2017 年８月 10 日〜９月 10 日）と題して東京国立近代美術館工芸館名品展が行われた。この東京国立近代美術館工芸館は 2020 年に石川県への移転が決定しており、そのコレクションを周知する目的で「東京国立近代美術館工芸館名品展」が石川県立美術館を会場に 2016 年は「近代工芸案内」（2016 年 12 月 21 日〜 2017 年２月 12 日）、2017 年は「陶磁いろいろ」（2017 年 11 月 11 日〜 12 月 17 日）と題して開かれた。ほかにも金沢卯辰山工芸工房や輪島漆芸技術研修所などで、東京国立近代美術館工芸館の所蔵品を数多く並べた企画も開催され、移転への意識付けを高める企画が行われた。

年が明けて 2018 年は、各地で数十年ぶりという大雪に見舞われた。北陸新幹線こそ雪に影響されなかったものの、各所で交通が乱れ、臨時に閉館することまで考えなければならないほど難渋した。来館者あっての美術館ということを改めて感じた日々であった。

色々と話題の多い１年が終わり、楽しみな１年がまた始まる。

石川県立美術館「燦めきの日本画」展　会場風景

21 世紀鷹峯フォーラム in 石川・金沢オープニングトーク

東海ブロック

休館が続く中、際立つ企画展

高北幸矢（たかきた ゆきや・清須市はるひ美術館）

東海ブロックでは、改修にともなう美術館の休館が続いている。名古屋市美術館は、2017年6月から10月まで休館。愛知県美術館は、2017年11月から2019年3月までの長期にわたって休館中。静岡県立美術館は、2018年3月より6月まで休館中。岐阜県美術館は、2018年11月より1年間休館が予定されている。また豊田市美術館は、2014年の1年間の休館に続いて2018年7月より2019年5月まで予定されている。

休館は、耐震補強、老朽化にともなう補修、施設充実のためのものであって、新たな期待を伴ったものでやむを得ないものであるが、そこから生み出されて行くものを期待したい。改修工事中愛知県美術館から重要所蔵作品の保管依頼を受けている豊田市美術館が、自館所蔵のグスタフ・クリムト《オイゲニア・プリマフェージの肖像》と愛知県美術館所蔵《人生は戦いなり（黄金の騎士）》のクリムト2点を並べての展示で華やかな話題を提供している。こうした展示は、改修工事中の愛知県美術館コレクション館外公開でもあって、愛知県美術館サテライト事業として位置づけられている。

休館が続く中で活気を見せる4つの展覧会を取り上げてみたい。豊田市美術館「ジャコメッティ展」（2017年10月14日〜12月24日）は、その知名度の高さに対して、まとめて観ることが叶わなかったことが大きな期待となって初日を迎えた。ギリギリまで切りつめられた人体の造形、多くの肉感的で表情豊かな彫刻に反してストイックに突き詰められている。ジャコメッティ彫刻が作り出す立体は、その空間を支配して美しい。想像を超える多数の作品に観覧者は黙して満たされていたようだ。

大胆なタイトルが注目を集めながらも内容がわかりにくいとされた岐阜県現代陶芸美術館開館15周年記念「1964証言―現代国際陶芸展の衝撃」展（2017年11月3日〜2018年1月28日）。1964と言えば前回の東京オリンピック開催年、開催を機に全国4つの美術館で開催されたものの再現展である。当時世界における現代陶芸がどのような状況にあったのか、美術における陶芸の置かれた位置は、極めて曖昧なものであった。僅かな情報をもとに陶磁器研究家で陶芸家でもあった小山冨士夫一人が世界を旅しその眼で一堂に集めたものである。優れた一人の才能が、また優れた一つの展覧会がその後の大きな道筋を作ることを知る。現代においても陶芸美術のおかれた位置はなお困難をともなうものであることを考えるに「証言」が意味するものは甚だ大きいと言える。

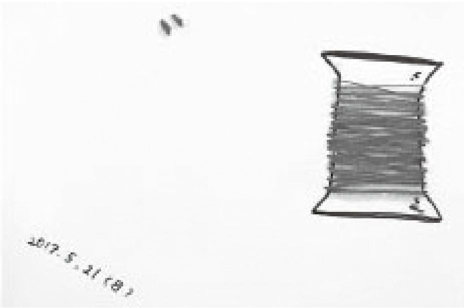
名古屋生まれの真島直子が凱旋展とする名古屋市美術館「真島直子 地ごく楽」展（3月3日〜4月15日）。眼を背けたくなるオブジェのポスターは、眼を向けさせるべきポスターにあって逆説的なパワーを持って町中に掲示された。「地ごく楽」のタイトルは、作品に呼応して興味を喚起する。それは死を見せて、生を見せていく真島が私たちに問い続けるテーマである。芸術とは何かの答えがそこにあった。

「日常を綴る 宮脇綾子展」と同時開催された清須市はるひ美術館「モンデンエミコの刺繍日記」展（2017年10月11日〜12月10日）。金沢美術工芸大学で金属彫刻を学び、制作を続けていたモンデンが、アトリエという場を失い、結婚・育児という環境の中でたどりついた刺繍。作品の物理的スケールが意味するものを何度も自問して、創作を辞めるかどうかの二者択一の中で手にした表現としての刺繍。芸術の王道から背いて、毎日眠るように、食事をするように、当たり前の日常として得た刺繍日記は、生きる上で大切なことを教えてくれるものであった。同時開催の宮脇綾子の生き方と結果的に大きく重なるもので、美術大学で学ぶことができることと学ぶことができないものを互いに際立たせていた。

休館が続く東海ブロックの中にあって、名古屋ボストン美術館が2018年10月で閉館する。20年という美術館としては短い歴史ではあったが、そこで出会った作品の記憶は感動とともに残り続ける。

2017年10月1日、名古屋市に横山美術館が開館した。かつて輸出陶磁器の一大拠点であった名古屋、明治・大正時代に制作された輸出陶磁器の里帰り作品を中心に見せている。

豊田市美術館常設展示風景
グスタフ・クリムト《オイゲニア・プリマフェージの肖像》《人生は戦いなり（黄金の騎士）》



モンデンエミコ《刺繍日記》

近畿ブロック

留め置けぬ芸術と共に

橋本 梓（はしもと あずさ・国立国際美術館）

私事で大変恐縮ながら、勤務先である国立国際美術館の開館40周年を記念する展覧会「トラベラー　まだ見ぬ地を踏むために」（1月21日～5月6日）企画担当者の一人として奔走し続けた下半期であった。展示作品のうち半数は所蔵品であるがテーマ展に仕立て、パフォーマンスの展示やコミッションに積極的に取り組み、全館に展開した。この間、他館で開催された展覧会の十分な調査が叶わなかったにも関わらず、本稿のご依頼を受け大変心苦しいが、拝見することのできた展覧会を中心に、また筆者の関心に寄せてご報告したい。

執筆している現在も開催中の「トラベラー」展、会期が始まっても手が離せなかった。その理由の一つはパフォーマンス作品が会期中連日展示場で開催されること。もう一つはインスタレーションや、いわゆるタイム・ベースト・メディアと呼ばれる作品のメンテナンスやオペレーション改善（今回は特にロバート・ラウシェンバーグの《至点》1968年の作で5組の自動ドアから構成される）。最後に写真記録によるカタログ分冊の作成である。展示場での継続的なパフォーマンス運営、また二つ目に挙げた作品の類の扱いは、特に戦後の美術を取り扱う美術館が共通して直面する課題であり、いずれも関係各位がどのようにご覧になったか、拝聴する機会があれば幸いである。パフォーマンス作品については、国内では先駆的なパフォーマンス作品の「収蔵」として多数取材頂いたが、かたちなき作品に取り組むという仕事の延長線上にあるという意味では、むしろ1950年代以後の美術を美術館がどう扱うかという既存の問題と接続して検討すべきと筆者は考える。つまり、映像、音楽、インスタレーション、各種の資料体、そして様々な形態のパフォーマンスといった、これまで美術館が積極的に扱ってこなかった動的な作品といかに対峙するかという問いである。ここで重要となるのが、写真記録のみならず、動画撮影、作家へのインタビュー、関わった者へのヒアリングなどによるドキュメンテーション作成だ。未来へと残すことが可能なのは、時間と共に生成し移ろう作品の記録であり、これに真摯に取り組むことで美術館における現代美術作品の収集・保存・展示の可能性がより広がるのではないか。

こうした観点から触れておきたいのは、兵庫県立美術館で開催された「JAPAN KOBE ZEROの軌跡」展（2017年10月28日～2018年1月21日）、国立国際美術館の「態度が形になるとき ―安齊重男による日本の70年代美術―」展（2017年10月28日～12月24日）、芦屋市立美術博物館の「小杉武久　音楽のピクニック」展（2017年12月9日～2018年2月12日）である。街中での大規模なイベントなど、活動の性質的にもなかなか美術館での紹介が難しかったJAPAN KOBE ZEROは、このたびの展示によりようやく輪郭が浮かび上がった。作品の一部のみならず、丁寧な調査の結果導き出された様々な紙資料とデジタル化された写真・映像類がそれを可能にしたのである。カタログの発行に至らなかったことは残念だが、展覧会とパンフレットによってJAPAN KOBE ZEROがひとまず歴史化されたことは、近隣で現代美術に取り組む者として非常に心強く感じた。

安齊重男についてはここで改めて述べるまでもないが、現代美術をいわば出来事として、その現場に寄り添うようにカメラに収め続けて来た。もはや消失した作品や行為について、安齊の写真が与えてくれる手掛かりは大きい。本展では所蔵品となった1970年代の関西を中心とした記録写真を一挙公開し、東京偏重で語られる現代美術の別の側面に光を当てることにもなった。作曲家／演奏家として音楽と美術の領域を横断する小杉武久の個展は圧倒的な量の紙資料が印象的で、日付、演奏者、演奏の際の図面などが詳細に裏付けられ一つの世界を形成していたように思う。いわゆる過去の演奏資料のような「音」は展示されていなかったが、そのことがむしろ即興演奏を得意とする小杉の本質を逆照射しているようでもあった。

より俯瞰して2017年度下半期を見れば、大きな話題となったのは62万人を超える来場者数を数えたのが京都国立博物館の「開館120周年記念特別展覧会　国宝」展（2017年10月3日～11月26日）。また大英博物館からの巡回となったあべのハルカス美術館の「大英博物館 国際共同プロジェクト　北斎ー富士を超えてー」展（2017年10月6日～11月19日）も盛況であった。3月19日には「再生」した太陽の塔の内部の公開が始まり、予約の取れない人気ぶりである（4ヶ月分の予約は4月の時点でほぼ完了）。大阪は2025年の万博誘致に向けて力の入った（しかし奇妙にドメスティックな）キャンペーンが展開されている。1970年の日本万国博覧会は、建築・美術・音楽・映画などのジャンルが入り乱れた実験場となり、様々な果実をもたらした。果たして大阪が再び開催地となるのか。決定は今年の秋である。

国立国際美術館「トラベラー　まだ見ぬ地を踏むために」展　より
ロバート・ラウシェンバーグ《至点》1968年　国立国際美術館蔵
©Robert Rauschenberg Foundation
撮影：福永一夫

兵庫県立美術館「JAPAN KOBE ZEROの軌跡」展　会場風景

中国ブロック

地域密着の企画展が盛ん

神 英雄（じん ひでお・安来市加納美術館）

2018年3月31日、広島県三次市と島根県江津市を結ぶJR三江線最後の日。沿線には最後の姿を見ようと多くの人々が押し寄せた。中でも三次と江津の中ほどにある潮駅周辺では、満開の桜と列車を同時に撮ろうとするカメラマンであふれた。

その一角に日本画家中原芳煙（1875-1915）の生家がある。東京美術学校で川端玉章に師事し、卓越した表現力は美術界で高く評価されたものの、肺結核のために39歳で亡くなった。

数年前に美郷町教育委員会が生家に残されている下絵や模写作品の悉皆調査を行った。調査成果をもとに、今井美術館（島根県江津市）で「中原芳煙展」が開かれたのは6月17日からの3週間だった。多くの観覧者が夭折した天才画家の類まれな画業に驚き感動した。

その後、生家にあった代表的作品は島根県立美術館に寄託され、この夏の企画展で公開された。なお、6月には芳煙の生家前に記念碑が建立された。このように複数の機関や施設が協力しながら、継続的に地域の美術や文化を掘り起こして、その成果を広く伝える試みが各地の美術館で行われている。

島根県益田市の島根県立石見美術館では、2017年9月30日から11月13日まで「石見の戦国武将—戦乱と交易の中世—」展が開催された。

中世の島根県西部の石見では、複数の武将がしばしば衝突したが、彼らは協力して毛利や大内勢と戦うこともあった。近年、考古学や文献史学の研究が著しく進展し、石見の武将が、交易・交流による海外や日本海沿岸地域との繋がりを背景に個性あふれる独自の文化を創り出したと判ってきた。同展では、最新の研究成果を踏まえて、画聖雪舟が描いた《益田時尭像》はじめとする絵画作品や地元の刀工作の刀剣や工芸品に加えて、益田氏の政治・経済活動などを伝える「益田家文書」、国内外との交流を物語る中国・朝鮮・東南アジア産陶磁器の優品や各地の出土品など多様な作品が出品され、多くの人に新たな中世像を示した。

三次市の奥田元宋・小由女美術館で2017年4月24日から6月11日に開催された「奇々怪々！妖怪・おばけ浮世絵展」も、地域の素材を楽しく紹介するものだった。

1749（寛延2）年7月、この地に住む稲生武太夫がいくつもの妖怪と出会った。その時の体験の詳細が「稲生物怪録」に詳細に記されている。同展では、妖怪やおばけを描いた浮世絵に加えて、「稲生物怪録」関連の絵巻や資料が展示された。

同様の企画展は、2004年夏に現在のみよし風土記の丘ミュージアムで開かれた「稲生物怪と妖怪の世界」展を嚆矢として、進化しながら数年おきに開かれてきた。展示が契機となって物怪まつりが始まり、地域の博物館・美術館と商工会が手を携えて、妖怪によるまちおこしが継続している。2019年春には、新たな研究成果を踏まえて三次もののけミュージアムがオープンする予定だ。美術館を核にしたまちづくりの取り組みに多くのことを学ばせていただいた。

このほか、米子市美術館の「Rock, Paper, Scissors／石 紙 鋏　シンディー望月展」（2月25日～3月11日）が、地域の素材を多面的に見せる興味深い展示だった。

「展示作品をどう見て貰うか」という学芸員の課題解決を試みた企画展が複数あった。とりわけ島根県立美術館で1月2日から2月5日に開催された「みんなの美術室」展が特に印象深い。館蔵作品を「1時間目　かたちの冒険」、「2時間目　色のいろいろ」など5つに分け、学校の授業を巡るように展示した。この時間割に導かれながら、美術を楽しく体感して欲しいというのが狙いのようだ。筆者が訪れた時、解説パネルを読みながら作品について楽しそうに会話している家族を見て胸が熱くなった。

とはいえ美術館の努力だけでは限界がある。島根県内では、美術教育関係者が集まって2011年に結成された「みるみるの会」が、各地の美術館で精力的に対話型鑑賞を実施してきた。ナビゲーターに導かれながら、来館者は作品の世界に入り込み、作家の思いを身近なものに感じる。観客の視点で作品を見る試みは、県内の学芸員を巻き込みつつある。

ところで、私の勤務する安来市加納美術館では、平和を希求した画家加納莞蕾の想いを伝える展示をしている。岡田三郎助に師事した莞蕾は、独立美術展を発表の場とした。フォーヴィスムの影響を受けた作品が多い。戦後は自らの戦争責任と向き合い、一切の公募展への出品をやめてフィリピン大統領に赦免を願う嘆願書を出し続けた。2017年、私たちは画家の思いを広く伝えるとともに後世に伝えたいと願い、242点の嘆願書や返書をユネスコ「世界の記憶」（地域登録）に登録申請した。残念ながら、伊能忠敬文書など他の申請とともに国内推薦が得られなかった。現在、再申請に向けて作業が進められている。

中国地方の美術館やそこに勤める多くの学芸員が、地域素材の掘り起こしを行い、展示に結びつける努力を継続的に行っている。その一端をご紹介させていただいたことに心からお礼申し上げたい。

中原芳煙《群鹿之図》1909年　個人蔵　島根県立美術館寄託

四国ブロック

四国の学芸員力を考える

川浪千鶴（かわなみ ちづる・元高知県立美術館）

近年、美術館の役割は大きく様変わりしている。活動の範疇は拡大し、学芸員が担当する仕事内容も複雑化しているが、それらを担う人数は相変わらず十分ではない。結果、学芸員は多忙を極め、美術館の役割について考える暇すらないと嘆く声をよく耳にする。しかし、なくなっているのは果たして暇だけなのか？考える力のほうはどうなのだろうか？

私は、７年間の高知県立美術館勤務を昨年度末で終了し、この春にホームタウンの福岡に戻ったばかりだ。福岡県立美術館時代から高知県立美術館時代にかけて、昭和の最後から平成の最後に到る約35年間を学芸員として過ごしたことになる。その最後の半年を振り返るにあたって、地域や人々のための美術館という使命を掲げ、専門職として美術館の現場で奮闘する学芸員たちの「考える」力とその成果に注目してみたい。

まずは、美術館の要であるコレクション、その中核をなす郷土ゆかりのアーティストの作品や資料を再評価し、独自性の高い個展として発信した例を二つ。

香川県の丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では、主軸の猪熊コレクションを常設展示しているが、「猪熊弦一郎展　戦時下の画業」（2017年９月16日～11月30日）は、企画展として開催された。猪熊という一人の画家が戦前から戦中にかけて時代とどのように向き合い、戦争画の影響を戦後どのように自らの作品と周囲に残していったのか。膨大な未公開資料を丁寧に読み解き、想像力を駆使することで近代絵画史の新たな一面を掘り起こした労作。戦争画をめぐる研究は、今後は作家個々の各論からも深める必要性があることを示唆してくれた。

二つ目の、高知県立美術館で開催した「岡上淑子コラージュ展－はるかな旅」（１月20日～３月25日）は、同館が作品収蔵する高知在住作家の90歳での初回顧展。進駐軍が残した洋雑誌を素材に、1950年代の７年間に集中して制作されたフォト・コラージュ作品の質と量は、世界的にも類例がない。岡上作品をシュルレアリスムの系譜に連ねて比較分析することよりも、できる限り多くの作品展示と全作品集刊行をもって、この奇跡のように美しい、幻のフォト・コラージュ作品の全容をまずはストレートに、作品本位に紹介する判断は正しかった。結果、高知でしか見ることのできない唯一無二の展覧会として、美術館が地域美術の再評価に真摯に向き合った好企画として、予想を超える大きな反響を呼び、次なる公開や研究へと可能性を確実につなぐことができたのだから。

高松市と愛媛県久万高原町で開催された、二つの現代美術のグループ展では、地域と美術の関係を自ら深める美術館の創造力と継続力が印象的だった。

高松市美術館の「高松コンテンポラリーアート・アニュアル Vol.06 ／物語る物質」（2017年10月22日～11月26日）は、毎年担当者とテーマを変えて2009年から開催されているシリーズ展。テーマに即したアーティストを幅広く選出しながらも、香川ゆかりを含む中四国のアーティストを手厚く定点観測している。以前はこうした企画は全国各地で開催されたが、昨今すっかり珍しくなった。回を重ねた展覧会の成果が、地域美術のアーカイブ充実や同館の基礎体力向上につながっている点は、もっと高く評価されていい。

町立久万美術館が年間１回開催している企画展としての「シュらん2017」（2017年９月９日～11月23日）もまた、単発の展覧会だけではない長期プロジェクトの一面をもっている。核となっているのは、伊丹万作（映画監督）、中村草田男（俳人）、重松鶴之助（画家）ら松山出身の芸術家が大正期に共同制作した手書きの同人誌『朱欒（しゅらん）』（全９冊、現在同館所蔵）の存在。その翻刻出版を始めとする文化プロジェクト「座朱欒（ざしゅらん）」の一環として同展は企画され、愛媛ゆかりの若手アーティストたちは、美術館の空間全体を使ったコラボレーションを、「朱欒」の創造精神を現代に受け継いだ試みとして生き生きと展開させた。地域に残った文化の足跡を基に、現代のメディアを活用しながら深めていく野心的なプロジェクトの、今後の展開が気になる。

他にも、日本画の近代化に功績を残した、徳島出身画家の初回顧展「廣島晃甫回顧展－近代日本画のもう一つの可能性」（2017年10月21日～12月10日、徳島県立近代美術館）では、時間をかけた調査研究の成果が印象に残った。なお同展会期中には、全国美術館会議の地域美術研究部会会合が同館と香川県立ミュージアム、高松市美術館を会場に開催され、両地域における近代美術の成り立ちや歩みをめぐる貴重な発表を聞くこともできた。地方の美術館と学芸員の地道な活動功績とそこから見えてくる大きな可能性に、改めて感じ入ったことを付記したい。

岡上淑子《はるかな旅》1953年　高知県立美術館蔵
©Okanoue Toshiko, *A Long Journey*

岡上淑子《招待》1955年　高知県立美術館蔵
©Okanoue Toshiko, *Invitation*

九州ブロック

コレクションを生かした展覧会作り

森園 敦（もりぞの あつし・長崎県美術館）

昨秋から今春にかけて、九州ブロックでは長年の調査研究が実を結んだ優れた個展がいくつも開催された。代表例としては、大分県立美術館の「20世紀の総合芸術家 イサム・ノグチ―彫刻から身体・庭へ―」展（2017年11月17日～2018年1月21日）、福岡県立美術館の「没後50年　中村研一展」（2月3日～3月11日）などがあげられよう。両者とも戦争の影響を抜きに語れない作家たちである。

イサム・ノグチ展では、家具や照明器具のデザイン、さらにはモエレ沼公園に代表されるランドスケープ・デザインなど、彫刻以外の仕事にも焦点が当てられ、まさに総合芸術家としての作家像をあぶりだした。ワークショップなど関連イベントにおいても、それに見合う多彩な企画がなされ、学芸員の創意工夫が随所に見られた。なお本展は、美術館連絡協議会の「2017年美連協カタログ論文賞」において「優秀カタログ賞」を受賞し、全国的にも高い評価を得たことを追記したい。

中村研一展は、戦争画を一つのピークに据えながらも、初期の帝展時代の作品から戦後日展の重鎮へと昇り詰めるまでの、72年の生涯に描かれた作品を網羅的に集めたものであった。展覧会ではほぼ年代順に作品が並べられ、画風の変遷、一方で変わらぬ「連続性」をも見事に印象付ける空間作りがなされており、まさに画家・中村研一展の決定版となるものであった。図録も充実しており、特に膨大な自筆文献は、本書が今後中村研一研究の基礎資料となっていくことを裏付けている。

また九州国立博物館で開催された「新・桃山展 大航海時代の日本美術」（2017年10月14日～11月26日）も国内外の南蛮美術が一堂に会した秀逸の展覧会であった。鉄砲伝来の1543年から鎖国を完成させた1639年までの約100年間の複雑な文化交流を、信長・秀吉・家康を案内人として読み解くという明快なアプローチであったことが本展の最大の特徴であった。たった100年足らずの間に突如勃興し衰退していった南蛮美術の軌跡は、確かに政治と絡み合わせることでその輪郭が明確になるだろう。後に花開く江戸美術の発端に、ヨーロッパ美術との交錯により生まれた南蛮美術があったことに改めて気付かされた。

またその他に、熊本市現代美術館では「熊本城×特撮美術 天守再現プロジェクト展」（2017年12月16日～2018年3月18日）というユニークな展覧会が開催された。熊本地震から２年、現在も修復が続く熊本城を再現するため、地元出身の特撮美術監督・三池敏夫を中心に、ミニチュアセットを製作・展示するという興味深い試みは、熊本を元気づけるという目的を超えて、特撮美術の可能性にまで踏み込んだ大胆な挑戦でもあった。会場では、若い人たちを中心に特撮風に写真撮影する姿が印象的であった。

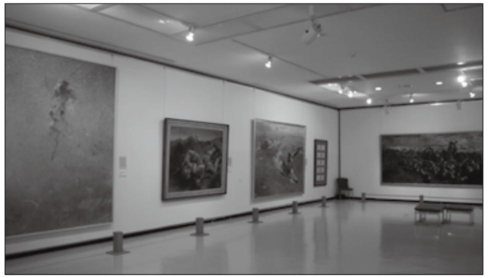
そして特筆すべきは、充実したコレクションを軸に九州内の美術館界を牽引してきた北九州市立美術館が、２年２ヶ月の改修工事を経て11月にリニューアルオープンしたことである。記念事業として開催された「英国最大の巨匠 ターナー 風景の詩」展（2017年11月３日～2018年２月４日）、そして同時開催の「ベスト・コレクション展」は、北九州市民にとって待ち望んだ美術鑑賞機会だったのではないか。

最後に私の勤める長崎県美術館のことに触れたい。当館でも戦争の影響を色濃く受けた作家を取り上げた（「松尾敏男展」１月16日～３月11日）。長崎出身の松尾敏男は、平山郁夫亡き後、2016年に亡くなるまで日本美術院理事長として日本画界を牽引した存在である。戦中の国粋主義の揺り戻しとして「日本画滅亡論」が席巻した時代を生きた最後の当事者ともいえる松尾を通して、戦後の日本画界の一断面を明らかにすることに努めた。

また同時に、長崎における創作版画のパイオニア的存在である田川憲の個展を小企画展として開催した（「長崎の美術６ 田川憲」展１月27日～４月８日）。これは当館が2005年に開館した当初から取り組んでいる「長崎の美術」シリーズ第６弾として打ち出したものである。当館の前身である長崎県立美術博物館では、長崎の黄金期である近世を取り上げることが多かったため、近現代を見直すことは当館にとって急務であった。開館13年を迎え、遅れを取り戻すように少しずつではあるが明治から戦後にかけての長崎の美術が見えるようになってきたように思う。加えて、当館のコレクションを活用した松尾展・田川展が一定の評価をもって鑑賞者に受け入れられたことは、我々にとって大きな喜びであった。

４月より各地にて開催されている「モダンアート再訪―ダリ、ウォーホルから草間彌生まで 福岡市美術館コレクション展」からも分かるように、コレクションの充実が美術館活動にとっていかに重要であるかは明白である。一方でコレクションの形成もさることながら、既存の個々の作品から発信される新たな魅力はまだまだあると信じて、所蔵作品の調査研究と展覧会作りの有機的な関係についてももう一度考えてみたい。

長崎県美術館「松尾敏男展」会場風景



福岡県立美術館「没後50年 中村研一展」会場風景

新規正会員紹介

有島武郎の精神を具現化する郷土博物館

NO. 1

有島記念館

〒048-1531　北海道虻田郡ニセコ町字有島 57

TEL: 0136-44-3245
FAX: 0136-55-8484
E-mail: arishima@town.niseko.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

［休館日］
月曜日（夏季は無休期間有）、年末年始

［開館時期］
1978 年 4 月 28 日

有島記念館は、蝦夷富士と称される独立峰・羊蹄山の裾野に位置し、国際リゾート地として知られるニセコ町にある。大正期の小説家・有島武郎（1878-1923）を顕彰した記念館がこの地にあるのは、有島が不在地主として所有した有島農場がここに存在したからである。

1897 年、有島の父・武は、マッカリベツ原野（現・ニセコ町）に農場を拓く。1908 年に有島が大学教官として札幌に赴任したのと同時に、農場は有島名義となり、管理も有島が担う。1917 年に大学を辞して以降、創作活動を本格化させて代表作『カインの末裔』や『生れ出づる悩み』を著すが、それらにはニセコの地が舞台として登場する。また長編小説『或る女』の一部はこの農場で執筆されるなど、有島の創作にとっても重要な場であった。

1922 年、有島は農場を無償解放する。この解放は相互扶助の精神に貫かれた農場の土地所有と運営とを共同で担う、組織設立を前提に行われた。有島は翌年に自死したが、1924 年に狩太共生農団が発足し、有島の望む形で営農が継続する。1949 年に戦後の農地改革により農団は解散するが、元団員が組織する有島謝恩会が旧農場事務所に「有島記念館（初代）」を開設。農場史や有島の思想を紹介する資料展示をはじめる。1978 年、後継施設として現在の当館がニセコ町により建設された。

この様な経緯から、農場関連の帳簿類、農具、民具、有島一族から受贈した有島の遺品類、美術作品が中心で、約 2,000 点を収蔵している。

有島は自ら絵筆を握るほか、雑誌『白樺』の活動を通して印象派の複製作品やロダンの彫刻などを札幌で紹介し、北海道美術史において大きな足跡を残した。その足跡や有島が自作のモデルとした画家・木田金次郎を支援した若手芸術家振興の精神に鑑み、1989 年から、中高生対象の公募展「有島武郎青少年公募絵画展」を開催している。2010 年からは、35 歳以下の美術家を対象とした隔年開催の公募展「平成の『生れ出づる悩み』」や企画展「有島記念館若手作家展」シリーズで若手作家の活動を紹介し、その作品を購入・収蔵している。あわせて、若手作家が講師となる講座などを行い、有島の芸術家振興の精神を事業として具現化することで、若手作家に発表や活動の支援を続けている。

2017 年には、北海道を代表するイラストレーター・藤倉英幸（札幌在住）より、北海道の風景を描いたはり絵原画やポスター、チラシなど約 1 万点の作品・資料を受贈した。今後、藤倉やその作品に関する調査・研究を行うほか、2018 年からは夏と冬に開催する年 2 回の藤倉コレクション展にて、テーマを設けて作品等を順次紹介する。当館は設立経緯から郷土博物館と自己定義しているが、今後は若手作家支援や藤倉作品を核とした美術館的な活動にも力を入れていきたい。　（伊藤大介・いとう だいすけ）

新規正会員紹介

柏林と山野草の広大な森に点在する美術の村

no. 2

中札内美術村

〒089-1366　北海道河西郡中札内村栄東 5 線

TEL: 0155-68-3001
FAX: 0155-37-6750

［開館時間］
午前 10 時から午後 5 時まで（4 月 27 日～ 9 月 24 日）
午前 10 時から午後 4 時まで（9 月 25 日以降）

［休館日］
4 月 27 日から 10 月 21 日の開館中無休

［開館時期］
1992 年 4 月

中札内美術村、六花の森は、北海道帯広市に本社を置く六花亭製菓が運営する美術館である。中札内美術村は、約 20ha の広大な柏林の中に中札内美術村が毎年開催している「二十歳の輪郭」全国公募展の全応募作品を通年展示する北の大地美術館、北の十名山など北海道の大地を描き続けた洋画家相原求一朗の美術館、京都建仁寺の天井画《双龍図》などを手掛けた日本画家小泉淳作の美術館、ほのぼのとした北海道の生活・風景を描き続けている真野正美の作品館、地元の作家の作品を展示するギャラリー柏林の 5 棟の展示棟とレストラン・ミュージアムショップ棟が点在している美術館群となっている。また春の新緑、秋の紅葉も楽しめる美術村庭園もオープンしている。

中札内美術村の敷地は、六花亭製菓の工場用地として取得したが、美術館建設が先行し、工場を建設する段階になり、「柏林を切ってまで工場はつくらない」とのオーナーの決断で北海道に残り少なくなった広大な柏林が保存された。そして中札内美術村の近くに新たに取得した工場用地が六花の森となった。

六花の森は、草木も生えていない荒れ地に草木を植え、小川を再生し、六花亭製菓の包装紙に描かれた山野草を植え、10 年の歳月をかけて昔の自然を再生し、100 年、200 年前に建てられたクロアチアの民家を移築した展示棟が点在する美術館群である。

山野草が咲く広大な森の中には、六花亭の包装紙に使われている山野草を描いた地元山岳画家坂本直行の作品館、一水会代表で北海道を愛し、北海道の自然を描き続けている洋画家小川游の作品館、十勝、中札内村の季節ごとの景色を描いている洋画家百瀬智宏の作品館、十勝の草花を描き続けている植物画家原高義の作品館、ドイツや北海道の自然風景を描き続けている池田均の作品館の他、六花亭製菓包装紙の原画に包まれた花柄包装紙館、児童詩誌『サイロ』の表紙を展示するサイロ五十周年記念館の 7 つの展示を森の散策と共にお楽しみいただける。

中札内美術村では相原求一朗生誕 100 年を記念して、2019 年 4 月 19 日から 5 月 26 日まで北海道立近代美術館ににおける「相原求一朗生誕 100 年記念展」を主催するので是非お出かけいただきたい。

（飯田郷介・いいだ きょうすけ）

蔵の里にさまざまなふるさとの風景

NO. 3

喜多方市美術館

〒966-0094　福島県喜多方市押切 2-2

TEL: 0241-23-0404
FAX: 0241-23-0406
E-mail: bijyutsu@kcmofa.com

[開館時間]
午前 10 時から午後 6 時まで
（展示室への入場は午後 5 時 30 分まで）

[休館日]
水曜日　（祝休日の場合は直後の平日）、
年末年始、展示替期間

[開館時期]
1995 年 4 月

喜多方市美術館は、喜多方市が行った「蔵移築再生事業」の一環として、「喜多方蔵の里」にある 7 棟の蔵群とともに建設され、1995 年 4 月に美術館として開館した。

喜多方市には大正から昭和にかけての時代、喜多方の商人や旧家である町衆たちによって支えられた、「喜多方美術倶楽部」という美術支援運動があった。その目的は、地方における芸術の普及のため、会津に来遊する芸術家をもてなし、画会や展覧会を開き、将来的には倶楽部の財産を作って美術館の建設を目指す、というものだった。組織は昭和の早い時期に消滅しているが、そんな先人たちの美術に対する思いが今に伝わり、地方の小都市には珍しい美術館の開設につながっている。

喜多方市は現在でもたくさんの蔵があることで「蔵のまち」と呼ばれ、喜多方市美術館は隣接する喜多方プラザ文化センター、押切川公園体育館、野球場そして蔵の里などとともに、カルチャーゾーンを形成している。喜多方市美術館の建物は、蔵のまちの施設らしく、煉瓦蔵をイメージしてつくられており、建物の一部には地元喜多方で焼いた煉瓦を用い、町並みとの調和を実現している。

常設展示はなく、企画展中心の美術館として運営しており、年に 7、8 回ほどの企画展を開催、地元ゆかりの作家を紹介する展示や、親子向けの企画、若手作家の紹介など、美術愛好者の裾野を広げるべく、様々な展覧会を開催している。企画展の一つであり、開館以来継続している全国規模のコンクール、「公募：ふるさとの風景展 in 喜多方」では、募集作品にそれぞれの心にイメージするふるさとをテーマにしており、写実的な表現だけでなく、心象風景や抽象絵画、技法においても版画やコラージュなど、多様な表現の作品が出品され、展示期間中には多くの美術関係者が来館するなど、年間企画の目玉の一つとなっている。

喜多方・会津地域の美術史の流れが展望できる作品の収集にも力を入れており、開館以来収集してきたコレクションは 600 点以上を数える。それらは、企画展の一つとして行われる館蔵展で展示される他、出前美術館などの教育普及事業でも活用し、美術への理解と、地域をあらためて見直すという役割の一端を担っている。当館は本年で 24 年目を迎えるが、今後も感動と喜びの場を提供するとともに、地域に根ざした特色ある美術館を目指し、より一層励んでいきたい。

（轡田倉満・くつわた くらみつ）

「観る・創る・育てる」コンパクトな“地域”の美術館

NO. 4

武蔵野市立吉祥寺美術館

〒180-0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-8-16　FF ビル 7 階

TEL: 0422-22-0385
FAX: 0422-22-0386

[開館時間]
午前 10 時から午後 7 時 30 分まで

[休館日]
月の最終水曜日、展示替期間、年末年始

[開館時期]
2002 年 2 月

武蔵野市立吉祥寺美術館は、2002 年、吉祥寺駅からほど近い商業ビルの中に開館した。大規模館ではないが、小さなサイズを生かした個性ある企画の展開につとめてきた。展示室は 3 つ。企画展示室では、企画展を毎年数回開催するとともに、年に 3 回、武蔵野市民の創作発表の場「市民ギャラリー」の期間を設けている。浜口陽三記念室及び萩原英雄記念室では、随時展示替えをおこないながら、両作家の版画作品や関連資料を常設展示している。開館時からのモットーとして「観る・創る・育てる」を掲げ、展覧会のほかワークショップ・講演会など教育普及活動も積極的に実施。立地に恵まれていることも手伝って、これまで市内外を問わず多くの方に足を運んでいただいている。

武蔵野市では、開館前、1989 年から約 10 年にわたって、武蔵野ゆかりの作家を顕彰する展覧会を開催し、あわせて作品を収集してきた経緯がある。現在では、野田九浦 (1879-1971)、織田一磨 (1882-1956)、小畠鼎子 (1898-1964)、江藤純平 (1898-1987) など武蔵野市に関わりの深い作家を中心に、2,500 点超の作品を所蔵している。“吉祥寺美術館ならでは”の企画を日々考えているが、そのうえで、これら所蔵作品の積極的な活用や所蔵作家の再評価も欠かすことはできない。幅広い領域にわたる企画展を開催するなかで、所蔵作品を軸とした企画展もほぼ毎年開催しており、武蔵野市を拠点に開花してきた美術をあらためて紹介するとともに、作品の修復、調査・研究の成果などもご覧いただいている。展覧会のみならず美術館や所蔵作品のあり方が多様化を極める昨今、美術館が「地域に有る」、あるいは「地域と在る」、ということの意味があらためて問われているように感ずるが、地域作家についての継続的な調査・研究や、これまで地域住民にも知られてこなかった作家の発見といった地道なことも、地域の美術館の重要な意義ではないかと思う。

武蔵野市は元来豊かな文化の素地を持っており、多様性にあふれたまちである。美術を取りまく環境は厳しいが、吉祥寺美術館の今後の可能性を、長期的な視線のなかで、多角的に考えていけたらと思う。

（滋野佳美・しげの よしみ）

“桜の馬場（ばば）”に建つミュージアム

no.5

豊川市桜ヶ丘ミュージアム

〒442-0064　愛知県豊川市桜ケ丘町 79-2

TEL: 0533-85-3775
FAX: 0533-85-3776
E-mail: bunka@city.toyokawa.lg.jp

［開館時間］
午前 9 時から午後 5 時まで

［休館日］
月曜日（ただし、企画展開催期間中の祝日は開館）、
年末年始（12 月 29 日〜 1 月 3 日）

［開館時期］
1983 年 9 月

豊川市桜ヶ丘ミュージアムは、豊川稲荷からほど近い桜ヶ丘公園内に位置している。かつて“桜の馬場”と呼ばれた桜ヶ丘公園内には、早咲きの「淡墨桜」という桜が 22 本、ソメイヨシノが 10 本あり、桜の名所として市民に親しまれている。

当館は、1983 年 9 月に“豊川地域文化広場”として愛知県と豊川市共同で整備された。その後、1994 年に市民ギャラリー、陶芸室、茶室の整備を行った。さらに高まる市民の要望に応える形で、2014 年に市民ギャラリーの拡大と、収蔵庫を増築する 2 度目の改修を行ない、名称を「豊川市桜ヶ丘ミュージアム」とし、2015 年にリニューアルオープンした。

当館は、ミュージアム区画とコミュニティ区画に大きく分けられる。

ミュージアム区画には、歴史・美術の常設展示室と 6 つの市民ギャラリーがある。豊川市桜ヶ丘ミュージアムは、豊川市の美術博物館としての役割を担っており、主に郷土に関する文化資料を収蔵している。歴史常設展示室では、美術的にも名高い鳥鈕蓋付台付壺（県指定・古墳時代）をはじめとする考古資料や、中世・近世の古文書などを紹介。美術常設展示室では、年 3、4 回ほどテーマを変えながら展示を行っている。近代以降の郷土ゆかりの作家や作品を中心に収蔵し、近年は現代美術作品の収集も行なう。市民ギャラリーでは、年数回の美術・歴史の企画展を開催している。また、一般向けに市民ギャラリーの貸し出しも行っていて、市民の文化芸術活動発表の場として利用されている。

コミュニティ区画には、会議室、実習室が 2 室（1 室は陶芸専用）、和室が 2 室、茶室 1 棟がある。市民のサークル活動や、ミーティングなどの利用で広く使われている。別棟の茶室「心々庵」では、庭園を眺めながら本格的なお茶を楽しむことができる。

教育普及活動として、展示解説会・講演会・ワークシートの頒布を行なっている。アーティストを学校へ派遣して芸術文化に親しんでもらうアウトリーチ活動のほか、子どもを対象としたキッズワークショップは毎月開催している。企画展開催時にはギャラリーフロアを使った無料のコンサートも実施している。

当館の運営には、職員はじめ、ミュージアムの活動をサポートしてくれるミュージアムボランティア、多数の地元企業による協賛、そして多くの市民利用者によって支えられている。今後も、市民の文化振興の一助となるような魅力ある施設・事業展開を目指していきたい。　（岡田有紀子・おかだ ゆきこ）

「見る」「読む」「描く」漫画文化の振興に努める

no.6

北九州市漫画ミュージアム

〒802-0001 福岡県北九州市小倉北区浅野 2-14-5「あるある City」5 階・6 階

TEL: 093-512-5077
FAX: 093-512-5130
E-mail: manga@city.kitakyushu.lg.jp

［開館時間］
午前 11 時から午後 7 時まで
（入館は閉館 30 分前まで、夏休みなど延長期間あり）

［休館日］
火曜日（休日の場合はその翌日）、年末年始など
夏休み等は無休で開館

［開館時期］
2012 年 8 月 3 日

北九州市漫画ミュージアムは、日本社会に深く広く浸透しているメディア芸術「漫画」について、北九州市ゆかりの漫画家に重点を置きながら資料の収蔵と利活用を行うべく、2012 年 8 月に設立された北九州市直営の文化施設である。JR 小倉駅の北側に位置する商業施設「あるある City」の 1.5 フロア分（5 階の半分と 6 階）を賃借し、運営している。

北九州市ゆかり（出生者だけでなく幼少期の一時居住者や成人後の移住なども含む）の漫画家は少なくとも 100 名におよび、全国的に見て多い部類に属する。代表的な名前を挙げるだけでも、松本零士・関谷ひさし・わたせせいぞう・畑中純・陸奥 A 子・文月今日子・萩岩睦美・北条司と枚挙に暇がない。また、イラストレーターやアニメーター、漫画原作者、フィギュア造形作家など、漫画に隣接する領域のクリエイターも多い。

収蔵資料は、北九州市ゆかり作家に焦点を絞って収集し恒久的に保存する「学芸資料」（専門研究員 1 名と学芸員 2 名が担当）と、漫画全般を広く扱い利活用に重点を置く「図書資料」（司書 2 名が担当）の 2 系統に分かれる。まず学芸資料は、関谷ひさし・陸奥 A 子など作家またはその遺族から寄託・寄贈された漫画原稿およそ 2 万点と、ゆかり作家の作品単行本や掲載雑誌など出版物およそ 2 千点の、合計約 2 万 2 千点。これらは自館での展示や、他館での展示のための貸し出し、作品集や画集等を手掛ける出版社へのスキャンデータ提供などの形で利活用しており、一般の閲覧は受け付けていない。

いっぽう図書資料は、館内の「閲覧（よむ）ゾーン」で観覧者が自由に手に取って読める形で運用している。蔵書数は、開架式の書架に約 5 万冊、閉架式の書庫に約 2 万冊の、合計約 7 万冊。ゆかり作家に限らず、日本漫画の歴史をたどる上で重要な作品を選書し、日々収集に努めている。

展覧会は、企画展示室（約 500㎡）で年に 4 〜 5 プログラムほどを実施。新聞社等から企画を買い取ることもあるが、自館単独か他の漫画専門館と共同での自主企画にも注力しており、自主企画は北九州市を中心に地元ゆかり作家の業績の顕彰を主眼としている。さらに、月 4 回の作画体験教室や、4 コマ漫画の国際公募コンクール「北九州国際漫画大賞」を年 1 回実施するなど、クリエイターの創作支援にも努めている。すなわち、「見る」（＝展示）「読む」（＝閲覧）「描く」（＝創作支援）の 3 つの側面から総合的に漫画文化の振興に努めるのが当館の使命である。　（表 智之・おもて ともゆき）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社
有限会社アート・フリース（大阪美術）
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ
株式会社アートローグ
有限会社イー・エム・アイネットワーク
イカリ消毒株式会社
イセ文化財団
株式会社印象社
AGC グラスプロダクツ株式会社
株式会社 NHK エデュケーショナル
株式会社 NHK プロモーション
M&I アート株式会社
影山幸一（アートプランナー・デジタルアーカイブ）
株式会社加島美術
株式会社学研プラス
カトーレック株式会社
公益財団法人かながわ国際交流財団
湘南国際村学術研究センター
株式会社ギャルリーためなが
株式会社求龍堂
株式会社キュレイターズ
協同組合美術商交友会
株式会社グッドフェローズ
株式会社クレヴィス
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科
高精細映像活用プロジェクト
株式会社廣済堂
金剛株式会社
JOPD 株式会社
株式会社集英社
株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
一般社団法人全国美術商連合会
公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
大日本印刷株式会社
株式会社丹青研究所
株式会社 TT トレーディング
株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
株式会社東京美術倶楽部
凸版印刷株式会社
株式会社トップアート鎌倉
トライベクトル株式会社
日油株式会社
日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
日本通運株式会社
ピープルソフトウェア株式会社
株式会社美術出版社
美術年鑑社　新美術新聞
株式会社伏見工芸
ホーチキ株式会社
有限会社丸栄堂
ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社
株式会社ユニークポジション
読売新聞東京本社
ライトアンドリヒト株式会社
株式会社レンブラント
早稲田システム開発株式会社
（五十音順）

事務局から

第 67 回総会について

企画担当幹事　渋谷 拓（しぶや たく・埼玉県立近代美術館）

2018 年 5 月 17 日（木）・18 日（金）の両日、富山県富山市にて開催された平成 30 年度第 1 回理事会及び第 67 回総会についてご報告します。今回の総会の開催にあたっては、担当館の富山県美術館のほか、高岡市美術館、砺波市美術館、富山県水墨美術館、富山県民会館美術館、富山市ガラス美術館、富山市郷土博物館・富山市佐藤記念美術館の皆様にご尽力をいただきました。改めてお礼申し上げます。

17 日午前にとやま自遊館にて開催された理事会では、総会審議に先立って、前年度の事業報告及び収支決算、今年度の事業計画案と収支予算案、新入の正会員・個人会員・賛助会員の審査、退会会員の報告に加えて、全国美術館会議の法人化、著作権ガイドの改訂版の発行が審議され、承認されました。

同日午後、富山県民共生センター・サンフォルテを会場に、建畠哲会長の開会挨拶、石井隆一富山県知事、森雅志富山市長の歓迎挨拶、圓入由美文化庁美術学芸課長の祝辞の後、正会員 157 館・250 名以上の出席により、富山県美術館の雪山行二館長を議長として第 67 回総会が開催されました。

審議事項として、平成 29 年度の事業報告並びに収支決算、平成 30 年度の事業計画案並びに収支予算案、新入の正会員、個人会員の入会が異議なく承認されました。新入の正会員としては、有島記念館、中札内美術村、喜多方市美術館、武蔵野市立吉祥寺美術館、豊川市桜ヶ丘ミュージアム、北九州市漫画ミュージアムの 6 館、個人会員としては新たに 9 名の入会となります。一方、2 館の退会があったため、平成 30 年 5 月末現在の会員数は正会員 389 館、個人会員 15 名、53 社（新規入会 2 社）で構成される組織となりました。

今年度の総会の焦点は、第 4 号議案である全国美術館会議の法人化でした。1952 年に設立されて以後、法人化を目指す議論はこれまでも断続的に続いてきました。法人化の承認を、今般いよいよ総会に諮るに至った要因を振り返ってみると、大きく二つ挙げることができます。第一に、全国美術館会議が、設立当初の館長による「親睦会」という趣の組織から、より「実践的」な組織になってきたという内的な要因があげられます。全国美術館会議は、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震などの非常事態に対応してきたほか、8 つの研究部会を通じて、美術館や学芸員が日々直面する問題に対処する場となっています。こう

した実践的な課題に取り組む中で、全国美術館会議は今や400館に迫る正会員を擁するに至り、美術館を正会員とする一つの大きな有力団体となっています。任意団体であることに起因する様々なデメリットやリスクが浮上してきているほか、事務局が所掌する業務もより多岐・複雑になってきているため、今後の円滑な運営のためにも事務局の体制を強化する必要も認識されています。美術館の今日的な課題に対処する実践的組織であり続けるために、全国美術館会議は大きな変化を決断すべき時期に来ていた、といえるでしょう。

第二に、公益法人制度改革によって法人化が困難ではなくなった、という外的な要因があげられます。詳細は総会議案書の資料「全国美術館会議の法人化について」に譲りますが、法人化が極めて高いハードルではなくなった以上、機関運営のさらなる適正化・透明化をはかり、団体としての社会的信用を高める措置を講じていくことは、多くの美術館が加盟する組織として不可避であるように思われます。この法人化については総会の場で様々な意見が出されましたが、将来的な公益社団法人化を視野に入れつつ、最初の一歩として一般社団法人化することが、最終的に圧倒的な賛成多数をもって承認されました。

報告事項としては、企画委員長の雪山行二富山県美術館館長の挨拶及び企画委員会の報告に続き、各研究部会の幹事から、前年度の活動報告並びに今年度の活動計画について報告がありました。また東日本大震災復興対策委員会を発展的に継承した災害対策委員会については、委員長の村田眞宏豊田市美術館長から活動報告がありました。

以上、全国美術館会議としての議案審議・報告が終了した後、総会という機会にあわせ、圓入由美文化庁美術学芸課長から、新しい文化庁の組織体制と美術館を巡る現状について、栗原祐司ICOM日本委員会京都大会実行委員より、2019年度に予定されているICOM（国際博物館会議）京都大会について、説明がありました。

また総会後に、樫尾直樹慶應義塾大学准教授による特別講演会「瞑想の美術史」が開催されました。瞑想の実践をもとに、西洋絵画で描かれている聖人などの姿勢・ポーズの意味や身体感覚を読み解くという、大変興味深い講演内容でした。

総会2日目は、担当館である富山県美術館を視察したほか、富山市内及び近隣自治体に所在する美術館などの見学会となりました。なお、総会で関係各館が集まる機会に、小規模館研究部会、ホームページ部会、地域美術研究部会の会合が同日、富山県美術館、高岡市美術館の施設をお借りして開催されました。

次回の第68回総会は、北海道立近代美術館に担当館となっていただき、2019年5月22日（水）、23日（木）に北海道札幌市にて開催されます。来年度も盛況となるよう、会員の皆様には振るってご参加をいただきますようお願いいたします。

「先進美術館」に端を発した議論と全国美術館会議声明「美術館と美術市場をめぐる基本姿勢について」に関わる経過報告

『読売新聞』5月19日付け夕刊に載った記事「アート市場育む『先進美術館』」は、美術館界とその周辺に大きな波紋を投げかけました。政府に「先進美術館」と指定された美術館が、所蔵作品の価値付けをして市場に売却し、その活性化を図るという内容が含まれていたからです。会員各館からその記事に対して懸念の声が上がり、報道関係者からも全国美術館会議に問い合わせが多数寄せられました。正・副会長と事務局を中心に論議した結果、文化庁の担当部署に記事内容の真偽を確認するとともに、全国美術館会議が考える基本的な美術館のあり方を、総意として明確にしておくべきだという結論にいたりました。文化庁からは「記事に書かれたような、美術館に作品を売却させるような施策は考えていない」という回答を得ましたが、投げかけられた論点が既に社会に広がっていて、さらなる誤解を誘発することへの危惧があったことから、昨年の総会で議決された「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」に基づく美術館界の姿勢を、できるだけ早く鮮明にしておかなければならないと考えたためです。6月上旬に作成された声明文（案）が臨時理事会において大多数の賛意を得て承認され、下記の声明を6月19日、全国美術館会議ウェブサイトで発表いたしました。これは、文化庁の施策への抗議や批判ではなく、あくまでも美術館のあるべき姿を私たち自身があらためて認識し広く公表するものです。その後、7月2日に正・副会長をはじめ4名が文化庁を訪れて芸術文化課長ほかと面談し、この会長声明について趣旨と内容を説明するとともに、文化庁に「リーディング・ミュージアム」の真意について質問しました。文化庁としては「美術館の作品売却によって市場を活性化する意図はなく、リーディング・ミュージアムの骨格もまだ決定していない」という説明を受けました。また合わせて、文化庁の見解を明らかにするような場を設定することを、全国美術館会議に期待している旨が伝えられました。

事務局では、そのことへの今後の対応を検討するとともに、報道メディアなどを通じて全国美術館会議としての立場をアピールしていきたいと考えています。（事務局企画担当幹事 渋谷 拓）

––––以下、声明を全文掲出

2018年6月19日

全国美術館会議
会長　建畠 晢

美術館と美術市場との関係について（声明）

本年4月17日、未来投資会議構造改革徹底推進会合「地域経済・インフラ」（中小企業・観光・スポーツ・文化等）第4回会合に、文化庁より「アート市場の活性化に向けて」と題した資料が提出された。また、これに関連して、『読売新聞』5月19日付夕刊に、美術市場の活性化と美術館・博物館との関係に言及した記事「アート市場育む『先進美術館』」が掲載された。

国内の国公私立美術館389館が加盟する全国美術館会議は、こうした昨今の状況に対し、2017年の総会で議決された『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』に基づき、美術館と美術市場との関係について以下のとおり基本的な見解を表明する。

美術館はすべての人々に開かれた非営利の社会教育機関である。美術館における作品収集や展覧会などの活動が、結果として美術市場に影響を及ぼすことがありうるとしても、美術館が自ら直接的に市場への関与を目的とした活動を行うべきではない。

美術館による作品収集活動はそれぞれの館が自らの使命として掲げた収集方針に基づいて体系的に行われるべきものである。美術作品を良好な状態で保持、公開し、次世代へと伝えることが美術館に課せられた本来的な役割であり、収集に当たっては投資的な目的とは明確な一線を画さなければならない。

なお、収集活動は購入ばかりではなく寄贈も大きな比重を占めている。将来にわたって美術館が信頼すべき寄贈先と見なされるためにも、この基本方針は重要な意味を持つものである。

この声明は、『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』のうち、以下のコレクション形成・保存に関する原則6と行動指針6に基づくものである。

美術館の原則6
　美術館は、体系的にコレクションを形成し、良好な状態で保存して次世代に引き継ぐ。
美術館関係者の行動指針6：収集・保存の責務
　美術館に携わる者は、作品・資料を過去から現在、未来へ橋渡しすることを社会から託された責務として自覚し、収集・保存に取り組む。美術館の定める方針や計画に従い、正当な手続きによって、体系的にコレクションを形成する。

※『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』は、全国美術館会議2017年度総会決議により策定された。これは「博物館法」（1951年制定・2014年改正）、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」（2011年告示）、「ICOM（国際博物館会議）職業倫理規程」（2004年改訂）、「博物館の原則 博物館関係者の行動規範」（日本博物館協会 2012年）を踏まえ、日本の美術館関係者が共有する文書として作成されたものである。

編集後記

『ZENBI』の14号をお届けする。かつて経験したことのない水害と猛暑の夏が過ぎようとしている。本誌では震災や噴火といった災害と美術館との関係について多くの頁を割いてきたが、今年もまた私たちの美術館がいつ天災の被害を受けるかもしれない「悪い場所」に位置していることをあらためて自覚する夏となった。原子力発電所がほとんど稼働していないにもかかわらず電力不足に至らなかったとはいえ、美術館は大量の電力を消費することによって美術作品を未来へと渡していくことを使命としている。大量集客の展覧会やインバウンド効果もよいが、私たちは美術館のレゾン・ド・エートルを見つめ直す時機を迎えているのではなかろうか。

昨年の「原則と行動指針」の採択に続き、今年度の総会では全国美術館会議を一般社団法人化する方針が確認された。この問題は中長期的な課題として今後も継続して検討されることになるだろう。全国美術館会議の活動が活発化するにつれて、美術館を取り巻く多くの問題も明らかになっている。先般の「先進美術館」構想についての素早い対応の経緯については31頁の報告に詳しい。結果としてやや勇み足だったかもしれないが、基本的な理念に基づいて組織として対応できたことは昨年「原則と行動指針」を策定した一つの成果といえよう。私たちは引き続き美術館の本分を守るために行動を続けたい。本誌がその一助となれば幸いである。

（O）

丸栄堂

美　術　商

日 本 画 • 洋 画 • 工 芸

代表取締役　淺木正勝

〒101-0021　東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821　FAX. 03-3831-7771

http://www.marueido.com

『ZENBI』では、次の要領で広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

［原稿の内容］
・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
・原稿には表題を付してください。

［投稿の資格］
・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
・匿名の投稿は受けつけません。

［投稿に係る詳細］
・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

［締切］
・第15号（2019年1月発行予定）については10月31日、
第16号（2019年7月発行予定）に関しては4月30日を締切とします。（当日必着）

［提出先］
〈メールの場合〉 s-osaki@pref.tottori.lg.jp（尾﨑）
aoyama@ma7.momak.go.jp（青山）
〈郵送の場合〉 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町　京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会　幹事 青山杏子

［問い合わせ先］
内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会　幹事 尾﨑信一郎

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
(1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
(2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
(3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
(4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否
(1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
(2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について
(1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
(2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
(3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
(4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いがが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について
(1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
(2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他
(1) 原稿料は支払わない。
(2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

NISSHA
EMPOWERING YOUR VISION

美術品管理システム Artize MA

NISSHA独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた
収蔵作品（資料）管理のための高機能データベース

「Artize MA（アルタイズ・エム・エー）」は、NISSHAの高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。

豊富な基本機能と柔軟なカスタマイズ
あらゆる美術館・博物館の作品管理業務への対応を考え、豊富な機能を基本パッケージに盛り込みました。個別ニーズに合わせたカスタマイズにも柔軟に対応でき、短期間でスピーディなシステム導入が可能です。

ユーザーごとのアクセス権限を詳細に設定
ユーザー管理画面から利用者のアクセス権限や作品情報の公開・非公開が設定可能。貴重な情報のセキュリティー保持も万全です。

高精細な作品画像を専用ビュアーで閲覧
「Artize MA」に登録された作品画像は、専用の高精細ビュアーで見たい部分を自由に拡大表示できます。

来館者用端末やインターネットを通じて広く収蔵作品を公開
非常に簡単な操作で、「Artize MA」に登録されている作品情報を、セキュリティーを保ちつつネットワークを経由して公開することができます（インターネット情報発信機能を標準搭載、Webサーバーはオプション）。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
http://artize.nissha-comms.co.jp/

京都本社（担当：和田）　604-8551 京都市中京区壬生花井町3　075（823）5151
東京支社（担当：山口）　141-0032 東京都品川区大崎2-11-1 大崎ウィズタワー22F　03（6756）7506
大阪支社（担当：石濱）　541-0047 大阪市中央区淡路町1-7-3　日土地堺筋ビル　06（6232）2714

国際博物館会議（ICOM）京都大会 2019 のご案内

ICOM 京都大会
準備室

いよいよ 1 年後に迫ってきた ICOM 京都大会 2019。
現在、大会準備室では急ピッチで作業を進めています。
今回は、詳細が確定した主な情報をお知らせします。
今後も順次、HP 等で情報を提供していきます。

1. 大会スケジュール

本大会は、「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ」をテーマに、2019 年 9 月 1 日～ 7 日の 7 日間にわたり国立京都国際会館にて開催されます。基調講演や各国際委員会のセッション、夜のソーシャル・イベント等を通じて、世界の最新動向を知り、各国の関係者と交流する大きな機会となります。また、参加者は、30 ある国際委員会で発表できます。募集は、2018 年秋～冬から開始予定です。

大会日程

日付	プログラム	夜
9/1（日）	諮問協議会会議　国内委員長・国際委員長会議	
2（月）	開会式 / 基調講演 / 各国際委員会のセッション ミュージアムフェア（展示会）	オープニング・パーティ（国立京都国際会館）
3（火）	基調講演・パネルディスカッション / 各国際委員会のセッション ミュージアムフェア（展示会）	ソーシャル・イベント（二条城）
4（水）	基調講演・パネルディスカッション / 各国際委員会のセッション ミュージアムフェア（展示会）	ソーシャル・イベント（北山エリア）
5（木）	各国際委員会のオフサイト・ミーティング（京都、関西周辺の博物館、文化施設、大学など）	ソーシャル・イベント（岡崎エリア）
6（金）	エクスカーション（京都府・京都市内・関西一円、遠方）	
7（土）	全体総会 / 諮問協議会会議	閉会式・パーティー（京都国立博物館）

国際委員会の分野

歴史・考古学	民族学	美術	装飾美術・デザイン	科学技術	自然史	
文学	エジプト学	都市博物館	地域博物館	博物館教育	歴史的建造物博物館	
公共の犯罪犠牲者追悼博物館	大学博物館	博物館学	博物館教育	人材育成	マネージメント	
広報・マーケティング	博物館建築	展示	セキュリティ	コレクティング	ドキュメンテーション	
保存	AV 技術とソーシャルメディア	楽器	武器・軍事	ガラス	衣装	貨幣

2. 参加登録料（税込み）

2018 年 11 月頃より、ICOM 京都大会 HP 上で参加登録を開始します。
料金は申込時期や申込者の属性によって異なります。

カテゴリー	早割料金（2018.11 ～ 2019.4）	事前料金（2019.5 ～ 2019.8）	当日料金（2019.9.1 ～ 7）
ICOM 会員	43,000 円	56,000 円	68,000 円
ICOM 非会員	56,000 円	68,000 円	81,000 円
同伴者 * 会議への参加不可	31,000 円	37,000 円	43,000 円
学生	31,000 円	37,000 円	43,000 円
1 日券 *9/2, 3, 4,のみ最大 2 日まで	10,000 円	10,000 円	12,000 円

3. ミュージアムフェア（展示会）

大会期間中の 3 日間にわたり、メイン会場にて展示会を開催します。
関係の企業・団体の皆様に出展していただけます。

ブース	価格（税抜き）
3m × 3m	350,000 円
3m × 2m	250,000 円

ICOM 京都大会についての詳細・お問い合わせ先

ICOM 京都大会 HP　http://icom-kyoto-2019.org/jp/
ICOM 京都大会準備室　TEL: 075-561-2127　Email: office@icomkyoto2019.kyoto
〒 605-0931 京都市東山区茶屋町 527 京都国立博物館